

【しがみつかれた時に～その①～】

なんだかわからないけれど、その職員が出勤してくると心乱れる利用者の方がある。どこの事業所でも経験しているよくなる風景なのではないでしょうか。

もちろんその職員の出勤が楽しみで、出勤すると「明るく元気になり、のびのびと活動的に過ごし、意欲的に係わりを求めてくる」という状況であれば、それは万々歳の支援状況で、全く問題が無いのですが、心理的な葛藤を抱え、愛着の表現が不器用で、時に反対の行動にそれがあらわれ、もともと知的障がい・自閉症であることで、自ら発する係わりの手段も限られるとすれば、なかなか万々歳の状況は生じ難いと考えられます。

今から 30 年ほど前のことになりますが、Aさんという担任女性職員が出勤してくると、必ずバケツ一杯の水を廊下にまき、放尿しながら廊下を歩き回るという行動を呈するBさんという利用者の方がいました。もちろん、他の職員の出勤の時には全く見られない行動です。したがってA職員のこの行動への理解方法は、当たり前のように「私は担任として嫌われている」といったものでした。

いまから 30 年前ですから、構造化支援も視覚的情報提供も私たちの支援メニューにはありません。ただ気合いだけで支援しているようなもので、その中で出した結論は、<出勤と同時にBさんに駆け寄り、彼が水を撒く準備に入る前に、「今日、夜勤だから宜しくね。楽しみに待っていてくれたんでしょ。私も楽しみだったのよ。Bさん、大好きだよ」と伝えながら、大好きな音楽テープと一緒に聞くと>という支援方法でした。

「私のことは絶対嫌いです」と主張していたA職員には、この支援方法を納得してもらうには、少々の説明が必要でした。

人には、係わりの価値の置き方に 3 種類があります。一つには、肯定的な係わりで、ほめられる、感謝されるなどの係わりです。二つ目は、否定的な係わりです。叱られる、非難されるというような係わりです。三つめが、ニュートラルな

係わりで、特に価値観の無いコミュニケーションです。情報交換、伝達、報告の類です。

人は、肯定的な係わりが一番うれしいわけなのですが、それを得ることが困難な場合には、ニュートラルなコミュニケーションよりも否定的な係わりを求めようになります。知的障がいがあれば、通常は肯定的な係わりを得ることが比較的困難と考えることができますから、否定的な係わりであっても貴重な「係わり」の手段として、手っ取り早くそれを使うようになります。長く険しい努力をして、肯定的な係わりを得ることよりも、簡単で手っ取り早く否定的な係わりを生じさせる「反社会的行動」を選択するのです。

また、努力したにもかかわらず、認められなくて傷つくよりも、最初から「どうせ嫌われている」と「反社会的行動」に走った方が、心の傷つき度合いは相当に低くなることも、この行動を選択させる要因になっていると思われます。

わたしたちは、B利用者さんはA職員さんのことが本当は好きなのに、それをまっすぐに伝えることができなくて、「叱られる」という手っ取り早い、しかも確実な「係わり」を求めて、廊下に水をまき、放尿をしたと考えました。

B利用者さんの心の奥に潜むポジティブな想いに、私たちは一歩先んじてポジティブな係わりで応えようとしたのが、前記の支援方法です。「意を感じたら先回りをする」そんな風に自分たちの支援方法を名付けました。

さて、ここで次回につながる宿題を出しておきましょう。

C職員さんの出勤にD利用者さんは、心乱れてしまいます。他の職員には決して見せない行動を呈します。髪を引っ張り、つねり、果ては噛みついてしまいます。しかし、D利用者さんはC職員さんのことを決して嫌いのように見えません。さて、スケジュールを使った支援方法はいかに？D利用者さんの好きな活動（ストレングス）は、「一緒に電車の本を見る」です。行動理解の方法と併せて考えてみて下さい。